光明小学校における中学校区説明会の報告について(要点のみ)

- 1 日時 令和6年(2024年)5月29日(水)9時半~10時45分
- 2 場所 光明小学校4階 多目的室
- 3 内容 以下のとおり

1 光明小学校の児童数・学級数の推移

- ① 光明小学校が開校した昭和54年からの児童及び学級数の推移を記載した資料である。
- ② 昭和54年というのは、本市の人口急増期に対応するため、宝塚市に非常に多くの学校が建設された時期である。
- ③ 開校時は全学年揃っておらず、翌年から全学年が揃った。その当時の学校規模は、中規模から大規模に差しかかるような規模だった。
- ④ 昭和後半から平成前半にかけては、少子高齢化という言葉が出始めた頃で、子どもの数が減ってきており、光明小学校においてもそのような影響があり、児童数が年々減っていった。

2 住民基本台帳による人口

- ① 光明小学校区の町丁目別の人口の表である。
- ② 小林3丁目は8番と9番、小林4丁目は7番が光明小学校区である。
- ③ 福井町のみが高司中学校区で、過去に福井町に1・2人しかいなかった年があり、その数名のみが高司中学校に行くという中学校区編成については、課題があるとされていた。

3 通学区域

- ① 現在の通学区域である。
- ② 色付けしている箇所が小学校区、赤い太線が中学校区を表している。
- ③ 光明小学校区は㊸と記載されている箇所、中心部に中学校区の線があるが、この左側は宝塚第一中学校区で、右側が高司中学校区となっている。
- ④ 1校の中学校に全員が進学できればいいが、光明小学校は2校の中学校に進学となっている。他の地域でもこのようなケースがあり、小・中学校の校区の整合がとれていない現状が宝塚市の課題である。

4 宝塚第一中学校・高司中学校

- ① 光明小学校の進学先である宝塚第一中学校と高司中学校の生徒及び学級数である。
- ② 本市では、両校とも適正規模の範囲内の学校と位置付けている。

5 学校の歴史

- ① 小学校と中学校は成り立ちの経緯が異なる。
- ② 小学校は、明治維新後の学制からできたが、本市では、良元小学校、宝塚小学校、小浜小学校、長尾小学校、西谷小学校がそれにあたる。
- ③ 中学校は、昭和 22 年に学校教育法ができて、現行制度の中学校ができた。
- ④ 学校教育法ができる前は、大学・中学・小学で、小学校の中で 9 年間の義務教育が構成されており、中学校は高校だった。
- ⑤ 明治 5 年から 22 年までは、光明小学校の辺りは良元村と言われていた。良元村というのは、明治 22 年の市制・町村制によりできた。
- ⑥ 江戸時代から明治時代になる頃には、小林村、鹿塩村、蔵人村、伊子志村があり、後の良元村が構成されていた。
- ⑦ 小林小学校は明治 5 年からあり、蔵人村には分教場ができて、後に西蔵小学校になった。鹿塩村にも少し遅れて正業小学校ができた。
- ⑧ いずれの学校もお寺や民家の 1 室を借りて実施していたもので、今のような体裁が整った学校ではなかった。
- ⑨ 当時は、1 つの集落単位で 1 つの学校が認められていたが、財政上、学校運営が困難であったことから、分校になったり統合したりということが繰り返されていた。
- ⑩ 小林・鹿塩・蔵人においても統合が繰り返され、小林簡易小学校に統合後、良元尋常小学校になり、今の良元小学校となった。
- ⑪ それぞれの地域ごとに学校があって、地域単位で学校が運営されていたものが、最終的には市制・町村制によって、良元小学校ができた。
- ⑫ 明治 22 年以後に今の校舎のようなものが建ち始め、人口が少ないからというものもあり、右岸側の学校は、しばらく良元小学校 1 校体制が続いた。
- ⑬ 昭和 11 年に旧の伊子志村の一角、今の支多々川の横の場所に宝塚第一小学校が開校した。その後、仁川小学校、西山小学校、未成小学校、逆瀬台小学校が開校した。
- ⑭ 昭和 22 年に今の西山小学校がある場所に宝塚第一中学校が開校した。
- ⑮ 昭和 36 年に宝梅中学校が開校したが、宝塚第一中学校に近かったことから、現在の場所に宝塚第一中学校が移転した。
- ⑯ 昭和 51 年に高司中学校が開校し、光明小学校区あたりの中学校区が宝塚第一中学校区から高司中学校区になる。
- ⑰ 昭和 54 年の人口急増期、第 2 ベビーブームで生まれた子どもたちを受け入れるための学校として、光明小学校等が開校した。
- ⑱ 昭和 63 年に光ガ丘中学校が開校したが、宝梅中学校の少し上に建てられたことから、右岸側全域の校区変更が必要となった。

6 中学校区の変遷

- ① 光明小学校における中学校区の変遷である。
- ② 昭和 50 年以前は宝塚第一中学校区で、昭和 51 年の高司中学校開校時に、光明小学校区全域が高司中学校区になった。
- ③ 光が丘中学校が開校したことで、光明町、小林 3 丁目 8・9 番、小林 4 丁目 7 番が宝塚第一中学校区で、福井町が高司中学校区となる。

7 本市の課題

- ① 2040 年頃には、14 歳から 64 歳までの生産年齢人口と 65 歳以上の人口の割合が 1対1になり、一人が一人を支えなければいけない時代を迎えると言われている。その中で、大きな課題となるのが、人口急増期に建設された小学校を含む公共施設の在り方である。
- ② 公共施設も年数が経てば、老朽化改修工事や長寿命化改修工事が必要になる。建て替えができないことから、少しでも長く使用可能とするために、これらの工事を実施しているが、それにも大きな費用が必要となる。
- ③ 高齢者を支えるための費用や、公共施設を維持するための費用を、人口減少時代の中で、どのように解決していくのかが、自治体全体の大きな課題である。
- ④ 宝塚市の公共施設の 50%近くが学校施設と言われており、学校が公共施設の維持に一番負担をかけていることも 1つの課題である。
- ⑤ 少子化における学校の維持管理において、費用的な維持管理と、教育的効果の維持管理がある。学校は、集団の中で、人との関わりの中で色んなことを学んでいくという大切な場であるが、子どもの数が減ってきた時に、そうした集団というものの機能を果たせるのかということも含めて、考えていかないといけないという課題がある。
- ⑥ 小中学校間の通学区域の不整合で、小学校から進学する中学校が 1校だけであれば、9年間を見通した教育活動が展開しやすくなる。
- ⑦ 児童生徒数の学校間格差については、宝塚第一小学校や長尾小学校のように千人を超す規模の学校もあれば、光明小学校のように各学年単学級の小規模校の学校もある。学校間の人口格差の問題があり、これも教育環境に幾分かの影響が出てきている。
- ⑧ 教育制度の見直しで、昭和 22 年当時の子どもたちと、今の子どもたちの発育状況を比較した時、今の 5 年生ぐらいの子が、昭和 22 年当時の中学校 1 年生と同じぐらいで、2 年程、若年化していると言われている。当時、中学校ぐらいで教科学習をしたら、学習効果が上がると言われていた 12・13 歳の子どもが、今は 9・10・11 歳ぐらいだと言われている。そうしたことで、教育制度の見直しが必要ではないかということで、平成 28 年(2016 年)に義務教育学校の制度ができた。
- ⑨ 義務教育学校というのは、小学校・中学校という区別はなく、1 年生から 9 年生までの学校である。小中一貫校は、小学校と中学校が連携して、9 年間を見通した教育カリキュラムを作る学校であり、小学校と中学校の区別は存在する。
- ⑩ 義務教育学校に必ず移行していかなければならないということではないので、宝塚市に

は、現行の小・中学校制度が今も残っている。周辺には、義務教育学校を一部導入している自治体があり、また、積極的に取り組んでいる自治体もある。

⑪ 環境の変化への対応というのは、登下校中の熱中症の課題である。宝塚市の場合、山間部に学校があり、配慮していかなければならないという課題がある。

8 今後の教育改革

① 7 であげた課題を受けて、今後、教育改革をどのように進めていかなければならないのかという、まずは、小中学校間の通学区域の整合である。

② 小学校が町村単位・集落単位でできていたものが、明治6年頃から合併を繰り返し、良元小学校や宝塚小学校、小浜小学校、長尾小学校、西谷小学校ができた。小学校はそうした地域性を重視してできてきたものであり、もちろん中学校も地域性を重視してできてきたが、小中学校間の通学区域の整合がとれていないという問題がある。

③ これからは、9年間を見通した教育活動を展開するために、中学校を中心とした校区とし、小学校区と中学校区を整合していく必要がある。

9 段階的に着手(案)

① 中学校を中心として小学校の配置を考えていく場合に、光明小学校全域を高司中学校校区に編入し、あわせて経過措置を設けるとするのが、段階的な着手の1つである。

② 高司中学校区への編入について、現行の光明小学校区の大半は宝塚第一中学校だが、宝塚第一中学校まで非常に遠く、通学途上の問題があるほか、光明小学校区から距離的に近く、かつて同じ集落だったという点も踏まえて編入するということである。

③ 経過措置というのは、福井町在住者も含む宝塚第一中学校への就学を希望する保護者が、市に申請をすれば、宝塚第一中学校に就学することが出来るというものである。

④ 経過措置の期間については、今生まれているお子さんには影響がない期間を設定しようと考えているが、今後、地域の方のご意見を聞く中で適切に対応していきたいと考えている。